

赤十字国際救援派遣要員のストレス要因分析

齋藤 和樹¹⁾ 前田 潤²⁾ 丸山真理子³⁾

On Stress Factor Analysis for the International Activities of the Japanese Red Cross Delegates.

Kazuki SAITO Jun MAEDA Mariko MARUYAMA

要旨

日本赤十字社から海外に派遣された救援要員のストレス要因を50人のアンケート結果から分析した。アンケートでは、時系列に沿って「Ⅰ. 海外派遣が決まってから出発するまで」、「Ⅱ. 現地に到着直後」、「Ⅲ. 現地で活動中」、「Ⅳ. 帰国が決まって帰国するまで」、「Ⅴ. 帰国後仕事に復帰して」の5つの時期に、「1. どのようなストレスを感じたか」、「2. それらにどのように対処したか」、「3. その対処はどの程度有効であったか」、「4. 感じているストレスに対して所属する機関や周囲の人にどのように対応してもらいたかったか」を聞いた。各時期にさまざまなストレスがあり、対処法もさまざまであったが、いくつかの時期に共通して見られるストレス要因も見いだせた。それらは「情報不足」、「コミュニケーション・言語の問題」である。これらを解決することは、派遣要員のストレスの軽減になるだろう。また、対処法の効果の10段階評価を見ると、「Ⅴ. 帰国後仕事に復帰して」が他の時期に比して低かった。帰国後の職場での派遣員への理解と配慮の必要性も伺われた。

キーワード：赤十字、国際救援、ストレス要因

Summary : Stress factors of 50 delegates who were sent abroad from the Japanese Red Cross Society were analyzed. A special questionnaire was created to analyze stress factors at 5 situation points throughout the time line, which included “Ⅰ. Pre-departure”, “Ⅱ. Initial arrival in the field”, “Ⅲ. During the mission”, “Ⅳ. Mission completion, before returning to Japan.”, and “Ⅴ. After returning to Japan and the workplace.” There were 4 questions for each situation included; “1. What kind of stress did you experience?”, “2. How did you cope with the stress?”, “3. How effective was your coping strategy?”, “4. What did you want your workplace to do to assist you in coping?”. Various kinds of stress factors in each situation and various coping styles are found. “Lack of information” and “communication and language problems”, however, were common stress factors throughout all the situations. Solving these problems is expected to reduce their stress levels. In addition, the mean score of question 3 (coping effectiveness) in Situation V (after returning) showed lower scores than the other situations. The necessity for understanding and care given to the delegates after they come back to Japan was suggested.

Key words : Red Cross, international relief, stress factors

- 1) 看護学科助教授（臨床心理学）
- 2) 室蘭工業大学共通講座助教授（災害心理学）
- 3) 秋田赤十字病院心療センター臨床心理士

この研究は、平成15年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成を受けて行われた。また、この研究の要旨は、日本精神衛生学会第21回大会で発表された。

1. はじめに

本研究の目的は、日本赤十字社（以下、日赤）から派遣された海外救援・開発協力要員のストレス要因を収集し分析することによって、彼らを海外派遣に伴うストレスや惨事ストレス等から守り、心身ともに健康な状態で任務に赴き、活動し、無事帰還してスムーズに職場復帰を果たせるような環境作りに寄与する資料を得ることである。

我が国においても1995年の阪神淡路大震災のあたりから「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」という言葉とともに、災害時の被災者の「心のケア」への関心が高まり、その必要性や重要性は一般に認識されつつある。阪神淡路大震災後には、日赤においても神戸赤十字病院に心療内科が新設され、心療内科医と臨床心理士が配属された。さらに、2000年の有珠山の噴火災害では、日赤として初めて「心のケアセンター」を設置し、組織的な「こころのケア・プログラム」が計画、実施され、避難所に避難してきた市民の「心理的ケア」を行った^{1) 2)}。

一方、1985年の御巣鷹山での日航機墜落事故で遺体処理にあたった日赤の救護班員の中には、その後肉を食べられなくなった人や、いまだに感情が処理できずにいる人もいと報告されていて³⁾、被災者のみならず、救護者側の「心のケア」にも目が向けられるようになった。1994年のルワンダ難民の救援では、悲惨な状況の中での過酷な救援活動で燃え尽き症候群になった国際赤十字の職員も多いと言われていて⁴⁾、海外救援派遣要員の「心のケア」にも関心が集まってきている。

国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）は、こうした状況に対して、デンマーク赤十字社の協力のもと、コペンハーゲンに「心理的支援センター（2004年に「心理社会的支援センター」となった）」を設置し、「心理的支援プログラム（PSP）」の普及に努めている。日赤は、2003年にPSPを導入し、災害時の心理的支援活動を展開すべく、2004年からブロック単位の災害救護訓練（日赤では、災害救護のために全国を6つのブロックに分けて訓練を行っている）でもPSPの訓練を受けた「心のケア指導者」や「心のケア指導者」から伝達講習を受けた「心のケア要員」を取り入れた訓練を始めている。災害救護訓練において「心のケア」をどのように取り入れて訓練を構築するのかが課題の一つである⁵⁾。

国際救援の任務に赴く日本赤十字社の派遣要員

は、気候・文化・言語などさまざまな面で日本と異なる環境の中で、自然災害の被災者や紛争犠牲者の救援、難民・避難民の救援など異常事態への対応が求められる。それは日常業務に比べ、劣悪な環境下での過酷な任務である。また、これら災害等は突発的に発生するために、派遣要員は日常業務を中断して急遽海外に派遣されることになる。派遣が決まると日常業務に区切りをつけ、同僚に仕事を託し、家族の生活に気を配りつつ自身の派遣準備も急いでしなければならない。さらに、長距離の移動と時差のために肉体的にも精神的にも強いストレスを感じながら任務をこなさなければならないことが予想される。そのために、それらのストレスに起因するストレス反応を抱えたり、惨事ストレスからくる急性ストレス障害（ASD）やPTSDなども起こる可能性が高いと考えられる。また、燃え尽き症候群などになる可能性もあると予想される。過酷な任務のために、赤十字から離職したり、次回の派遣を拒否する人もいと聞く。訓練を受けた有能な人材を赤十字活動に活用できなくなるのは、組織としての損失が大きだけでなく、救援を求めている人たちにとっても不利益となることである。より多くの人々に対してよりよい救援を行うために、国際救援派遣要員のメンタルヘルスを健康な状態に保つ努力をすることは、赤十字の使命ではないだろうか。

長期間の訓練を受けた海外救援派遣要員という優秀な人材を燃え尽き症候群やPTSDなどで失わないため、この研究は大きな意義を持っていると考える。

なお、本稿では、「心のケア」「こころのケア」「心理的ケア」「心理的支援」は同義語として扱う。

2. 研究方法

国際救援派遣要員のストレスを分析するために、国際救援経験者たちの意見を参考に自作のアンケートを作成した（資料1参照）。このアンケートは、海外派遣の時系列に沿って「Ⅰ. 海外派遣が決まってから出発するまで」、「Ⅱ. 現地に到着直後」、「Ⅲ. 現地で活動中」、「Ⅳ. 帰国が決まって帰国するまで」、「Ⅴ. 帰国後仕事に復帰して」の5つの時期に、「1. どのようなストレスを感じたか」、「2. それらにどのように対処したか」、「3. その対処はどの程度有効であったか」、「4. その時期に感じているストレスに対して所属する機関や周囲の人にどのように対応してもらいたか

ったか」を聞いている。各時期の質問項目1、2と4は自由記述であるが、3は10段階評価である。

このアンケートを、日赤に持参し研究目的を説明し協力を求めた後、日赤から得た海外救援派遣者名簿を参考に、過去10年間に海外に派遣された経験を持つ人にアンケートを郵送し、同封した返信用封筒を使用して返送してもらう方法でデータを収集した。アンケート用紙はもちろん、返信用封筒も匿名で回収した。

データは、量的に処理できるものは記述統計的に処理し、質的データは任意にカテゴリーに分類して考察した。

3. 結果と考察

76人にアンケートへの協力を依頼したが、すでに日本赤十字社を退社したと連絡を受けた人や回答をお願いした期間にも海外任務に赴いている人も何人かいた。その結果50人から回答を得た（回収率65.8%）。回答者の性別および職種は図1と図2にまとめた。

性別では、男性が27名、女性が22名、無回答が1名でやや男性の方が多かった（図1）。

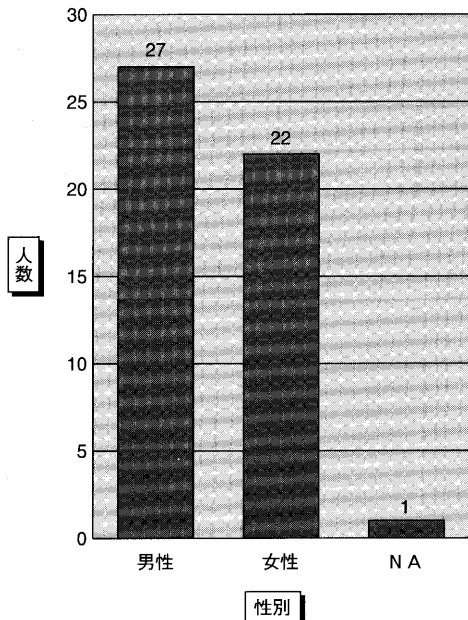


図1 男女別人数

職種別では、看護師17名、医師17名、技師7名、事務6名、その他1名、無回答が2名であり、医師と看護師が多かった（図2）。このように医療職が多く派遣されるのは、国際救援において日赤には医療救護班を派遣するよう求められるための

当然の結果であろう。その背景には、世界の赤十字社・赤新月社の中で日赤は看護教育を行う大学・短期大学を持っている世界唯一の国であることや全国に92もの多くの赤十字病院を持つ（この病院の中には付属看護学校を持つ病院もある）世界的にも数少ない国であることが考えられる。さらに、それら赤十字病院の多くがその地域の中核病院に位置づけられるなど高い医療技術を提供できると考えられる。

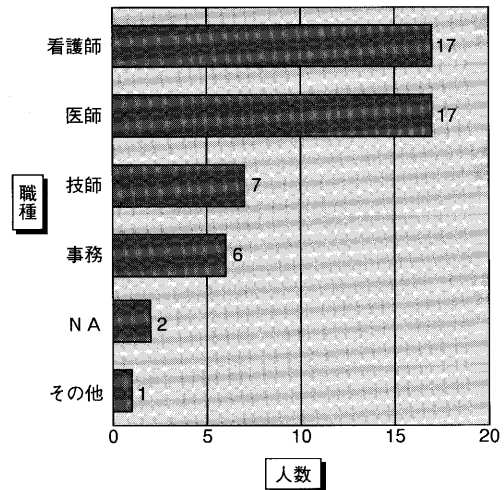


図2 職種別人数

派遣回数別人数と任務内容別人数については、図3と図4にまとめた。

派遣回数については、1回という人が最も多く16人（32%）で、次いで5回以上が14人（28%）であった（図3）。

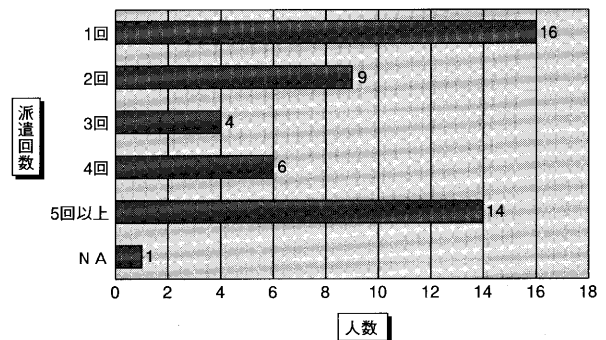


図3 派遣回数別人数

任務内容は複数回答であるが、「災害等の被災者の救援」が最も多く（31人）、次いで「紛争犠牲者の救援」（29人）であった（図4）。このように

医療救護を必要とするであろう内容が上位を占めていることは、前に述べた医療職の派遣が多いことと大きく関係していると考えられる。

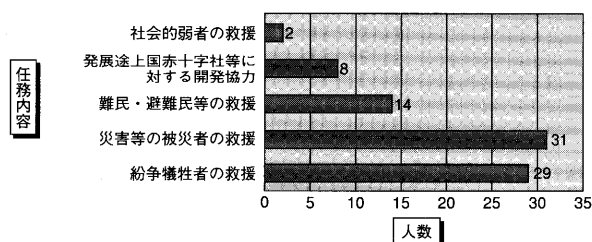


図4 任務内容別人数

派遣回数が多い人は、任務の種類も多くなる傾向にあり、5回以上の派遣回数のある人の中には、すべての種類の任務を経験している人もいた。また、派遣期間については、短いもので7日間であり、長期にわたるものは365日間であった。一般に看護師・事務員・技術者などは、医師よりも長期に派遣されている傾向が見られた。

「Ⅰ. 海外派遣が決まってから出発するまで」、「Ⅱ. 現地に到着直後」、「Ⅲ. 現地で活動中」、「Ⅳ. 帰国が決まって帰国するまで」、「Ⅴ. 帰国後仕事に復帰して」の5つの時期それぞれでのストレスへの対処の効果について10段階評価（「効果なし」を1点、「効果あり」を10点とした）してもらった結果の平均点、SD、得点範囲を表1～5にまとめた。

表1 出発するまで

平均	7.00
SD	2.00
Range	2～10

表2 到着直後

平均	7.39
SD	1.91
Range	2～10

表3 現地で活動中

平均	7.05
SD	2.25
Range	2～10

表4 帰国するまで

平均	7.05
SD	2.25
Range	2～10

表5 帰国後仕事復帰して

平均	5.40
SD	2.30
Range	1～10

Ⅰ～Ⅳの4つの時期については、ストレスへの対処の効果はおよそ7点（SD1.91～2.25）であるが、帰国後のストレスへの対処効果だけが5.40と点数が下がっている。これは注目し値する。効果得点の低い人たち（1～3点）のストレス内容を見ると、次のような状況であった。「時差があるにもかかわらず、帰国当日の夜から勤務が始まっており、さらに報告書の作成などがあり、日常業務+αの仕事をこなさなければならなかった」、「職場が海外救援に関心や理解がなく、海外で活動していた期間を単なるブランクとしか見てくれなかった」、「次の派遣を希望しても職場が乗り気でないため、派遣要員として登録されていても活動の場が閉ざされている」、「帰国後すぐに支部からの講演依頼などが多く職場で孤立した」、「帰国したら職場の配属が変わっていて仕事内容の変化やシステムの変化の激しさについていけなかった」などである。また、「被災地と（被災していない）日本との違い」にとまどっている人もいた。これらに対して、彼らは「やるしかない」とあきらめるか「忍耐する」か「対処不能」という内容の回答をしている。そして「帰国後せめて数日間の休暇がほしい」、「職場は国際活動にもっと興味を持ち、派遣要員を海外に派遣できる体制を整えて欲しい」、「本社は派遣要員に対して継続的な研修などをして要員がモチベーションを維持できるようにして欲しい」と期待している。

帰国後職場に復帰したときにストレスをうまく対処仕切れないでいるというのは、皮肉な結果である。通常、海外で仕事をしているときに最も強いストレスを感じそれへの対処にも苦慮すると考えられがちであるが、本調査ではそうではなかった。このことから「帰国後には休暇を与える」「派遣前の慣れた仕事に復帰させる」「海外派遣を当然のことと考えて、要員をあたたかく迎える」などの職場の配慮の必要性があるのではないかと考える。また、要員の方でも帰国後の再適応のストレスやその対処法についての理解を深め、そのスキルを身につける努力も必要であろう。さらには、派遣する組織側にも要員の職場へのスムーズな再適応のためのシステム作りや要員のストレス対処法のトレーニングプログラムなどを用意する必要性もあると考えられる。

アンケートの回答にあるさまざまな要望を真

撃に検討し応えることが、帰国後の海外派遣要員のストレスを軽減するのに役立つであろう。

自由記述を各時期ごとにカテゴリー化してその特徴をまとめると、次のようになる。「Ⅰ. 海外派遣が決まってから出発するまで」は、「派遣先についての情報不足」、「期待に応えられるかの不安」、「日常業務の整理調整」、「職場の無理解」、「渡航準備」、「準備時間の短さ」、「留守家族への心配」、「語学力の不安」などがストレスとなっていた。これらに対して、「情報収集」、「大丈夫と自分に言い聞かせた」、「休暇をつぶして仕事を片付けた」、「語学の勉強をした」、「同僚や周りの人をお願いした」、「開き直った」、「計画的に準備した」というような対処をしていた。中には、「精神科を受診した」と答えた派遣要員もいて、強いストレスがかかっていることが伺えた。この時期に周囲に期待する対応あるいはして欲しいこととしては、「情報提供」、「準備の時間を与えてほしい」、「海外派遣への理解」、「支援体制があることを示してほしい」、「留守中のスタッフの補充」、「普通通りに接してほしい」、「準備への配慮と協力」、「壮行会はやめてほしい」、「特に期待しない」などであった。

これは各時期に共通してみられた回答であるが、「その時期に組織や周りの個人に期待する対応はどのようなものですか。具体的にお書き下さい。」という質問に対して「質問の意味がわからない」という人が2～3名いた。また、この質問に対して「期待しない」という回答（4～7人）や無回答（5～22人）も多い。さらには、「周囲からの期待をストレスと感ずることはなかった」とか「成果・結果を残して欲しいという期待が痛いほど感じられた」など、明らかに質問の意味を取り違えていると思われる回答もある。海外派遣を希望し、派遣要員として登録される人々は自立的で、他人に頼るとか他人に何かをしてもらおうという発想に乏しいのかもしれない。

「Ⅱ. 現地に到着直後」は、「情報不足」、「設備の不備」、「言葉・コミュニケーション」、「キーパーソンの発見」、「現地へ順応すること」、「悲惨な現地の状況」、「疲労」、「孤独感」、「短時間で成果を上げなければならないこと」、「前の班との引き継ぎがうまくいかないこと」、「現地の食事」、「期待と自己の能力とのギャップ」などをストレスとして感じていた。一方、「日赤の仲間と仕事をするのでストレスはない」、「楽しいばかり」と

いう人もいた。これらのストレスに対して「情報収集」、「耐える・あきらめる・開き直す」、「コミュニケーションをとる」、「逃避」、「現地の人と協力」、「休養」、「無理をしない」、「自己努力」などで対処していた。

「Ⅲ. 現地で活動中」は、「治安の問題」、「地域特有の病気」、「気候」、「行動の制限」、「成果を上げること」、「過重労働」、「暇なこと」、「現場を日赤本社やジュネーブが理解していない」、「労働量の不平等」、「人間関係」、「コミュニケーション」、「文化の違い」、「惨事ストレス」、「抗マラリア薬の副作用」、「ニーズとルールの板挟み」、「戦闘員を助けても元気になるれば戦場へと戻っていくこと」、「自己の能力不足」、「情報不足」、「過酷な生活環境」、「設備の不備」、「家族と連絡が取れないこと」、「緊張感を維持しなければならないこと」などをストレスと感じていた。これらに対して、「安全確保」、「耐える・あきらめる・無視」、「感情的でなく合理的に考える」、「雑談をする・コミュニケーションをとる」、「休養をとる」、「過去の経験を思い出した」、「仕事を楽しむようにした」、「時々帰国した」、「物資の調達ルートを確認」、「人に聞く・助けを求める」、「日赤本社に相談」、「生活にメリハリをつける」、「いいところ探しをする」、「情報収集」などで対処していた。そして、「できるだけ電話やFAXでコミュニケーションをとってほしい」、「レポートを減らしてほしい」、「現場の意見を尊重してほしい」、「情報がほしい」、「人選に配慮がほしい」、「声かけ」、「励ましの手紙」、「要望に対する迅速な対応と肯定的な反応」、「過剰な期待はやめてほしい」、「日本からの定期的な連絡」などを望んでいた。

「Ⅳ. 帰国が決まって帰国するまで」のストレスは、「業務の引き継ぎ」、「自分の仕事への評価」、「帰国の交通手段の確保」、「出国時の手続き」、「帰国後の復職への不安」、「長時間の移動」、「スタッフとの別れ」、「レポート」、「帰国指示がはっきりしないこと」、「プロジェクトの途中で成果を見ないで帰ること」などであった。この時期は、「いろいろとすることがあり忙しい」という人もいれば、「解放された気分でストレスは全くない」という人もいた。対処としては、「相談」、「本社に苦情を訴えた」、「R&Rを十分に楽しむ」、「レポートを必死に書く・やるしかない・がんばった」、「極力体を休める」、「連絡先・メールアドレスの交換」、「事前に帰国の報告をする」、「自己評

価や反省をする」、「おみやげを買う」、「仕方ないとあきらめる」、「同僚と話す」、「レジャーを楽しむ」、「デブリーフィング」、「日々の活動をメモした」などを行っている。この時期の周囲への期待としては、「帰国手続きのサポート」、「出迎えなど形式的なことにこだわらないで欲しい」、「切り替えのための休暇が欲しい」、「移動のアメニティーをあげて欲しい」、「ハンドオーバーなどの細部は現場に任せて欲しい」、「当事者の身になって正確な回答が欲しい」、「励ましの手紙」、「帰国スケジュールを早めに知らせて欲しい」、「日赤の活動をPRして欲しい」、「被災地を日本でも時間がたっても報道して欲しい」、「事務仕事の軽減」などを期待していた。

「V. 帰国後仕事に復帰して」のストレスは、「国内モードへの変換・再適応」、「報告書の作成・報告会が多すぎる」、「国内でたまった仕事」、「休暇がない」、「してきた活動に対する無理解や誤解」、「海外で働いたことからくる過剰な期待」、「時差」、「その後の現地からの情報がない」、「現地と平和な日本とのギャップ」、「治安が悪くなり緊急一時帰国のつもりが任務終了となり罪悪感」などであった。これらのストレスに対して「無理をしない」、「有給休暇を取った」、「さっさと済ます」、「耐える・がんばる」、「時間が経つのを待つ」、「さまざまな機会をつかまえて説明した」、「情報収集した」、「友人・理解してくれる人と話をした」、「デブリーフィング」、「いつもより控えめにし、活動については必要以上に話さないようにした」などの対処をしていたが、「対処不能」という回答もあった。この時期の周囲への期待については、「過大評価しないで欲しい」、「派遣を当たり前と考える欲しい」、「活動に理解を示して欲しい」、「休暇が欲しい」、「帰国後の職場での業務量の削減」、「現地の情報を流して欲しい」、「優しい声かけ」、「話を聞いて欲しい」、「再適応の難しさを理解して欲しい」などであった。

各時期に特徴的なストレスとその対処法が見られると同時に、いくつかの時期に共通に見られるストレス要因も見いだされる。それらの一つは、「I. 海外派遣が決まってから出発するまで」の「派遣先についての情報不足」、「II. 現地に到着直後」の「情報不足」、「III. 現地で活動中」の「情報不足」、「IV. 帰国が決まって帰国するまで」の「帰国指示がはっきりしないこと」、「V. 帰国後仕事に復帰して」の「その後の現地からの情報

がない」ということばで示される「情報」あるいは「情報不足」に関することがらである。また、「I. 海外派遣が決まってから出発するまで」の「語学力の不安」、「II. 現地に到着直後」の「言葉・コミュニケーション」「キーパーソンの発見」「孤独感」、「III. 現地で活動中」の「人間関係」「コミュニケーション」「前の班との引き継ぎがうまくいかないこと」、「IV. 帰国が決まって帰国するまで」の「業務の引き継ぎ」などに見られる「コミュニケーション・言語」に関することがらである。「V. 帰国後仕事に復帰して」の「してきた活動に対する無理解や誤解」もコミュニケーションの不足によるものとも考えることもできる。このようにまとめると各時期に共通するストレス要因として「情報不足」「コミュニケーション・言語」をあげることができる。これらに上手に対処することによって、ストレスの軽減がはかれるものと考えられる。

4. 結論

日本赤十字社から派遣された国際救援派遣要員に対して、1) 派遣が決まってから任地で任務をこなして帰国して職場に復帰するまでの間にどのようなストレスを感じ、2) そのストレスに対してどのような対処をしたのか、3) その対処法はどの程度有効だったのか、4) その時期のストレスを軽減するために他人からどのようなことをして欲しいのかを聞いた。その結果、それぞれの時期に特徴的なストレスが見られると同時に、各時期に共通するストレスがみられた。「情報の不足」や「コミュニケーション・言語の問題」などはいくつかの時期にまたがってストレスの原因となっている。これらに対して「情報の確保」、「よくコミュニケーションをとること」、「よい人間関係」、「理解と受容」、「休息」、「適切な評価」などは、複数の時期に共通して有効なストレス低減の要素であると考えられた。

また、帰国して職場に復帰後のストレスに対する対処効果得点が、他の時期に比べて低かった。この時期のストレスに対する職場の配慮、要員のストレス対処法の工夫、要員のトレーニングプログラムの工夫などの必要性が示唆された。

5. 今後の課題

任務内容の違いや派遣期間・派遣回数などによってもストレスの要因が異なるようである。今後

は、派遣要員の条件を考慮した上で、さらにアンケートの内容や形式を整備して調査していきたい。

6. 謝辞

お忙しい中、アンケート調査にご協力いただいた国際救援派遣要員の方々に感謝します。

7. 文献

引用文献

- 1) 前田潤編著：有珠山噴火災害に伴う赤十字『心のケアセンター』の活動報告書，p1，自費出版，2001.
- 2) 槇島敏治・前田潤編：災害時の心のケア，p6，日本赤十字社，2004.
- 3) 前掲書2) p5.
- 4) 前掲書2) p5.
- 5) 齋藤和樹・前田潤：「こころのケア」を取り入れた赤十字災害救護訓練構築のための予備的研究，日本赤十字秋田短期大学紀要，No.9，pp.47-52，2004.

参考文献

- 1) Canadian National Defence Headquarters : Preparing for reunion stress, 1994.
- 2) 河野正賢・槇島敏治・沼田健之・菅原圭悟：「こころのケア」の手引き，日本赤十字社，1998.
- 3) ICRC : Health tips for staff on mission, ICRC, 1998.
- 4) IFRC : Managing Stress in the Field, IFRC, 2001
- 5) IFRC : Community-based psychological support. A training manual 1st edition, IFRC, 2003.
- 6) 槇島敏治・前田潤編：災害時の心のケア，日本赤十字社，2004.
- 7) 日本赤十字社国際救援センター：国際救援・開発協力員派遣マニュアル，日本赤十字社，1996

2004.7.31

資料1 「赤十字国際救援派遣要員のストレス要因分析」

調査へのご協力をお願い

齋藤和樹 日本赤十字秋田短期大学
前田 潤 室蘭工業大学
丸山真理子 秋田赤十字病院心療センター

災害時の救護においては、被災者の心のケアはもとより、救護者のメンタルヘルスへの配慮が大事であることは、日本赤十字社が進めている「こころのケア」教育の中でも強調されています。しかし、救護における救護者側のメンタルヘルスの実態については、系統的に十分に知られていないのが実情です。

私たちは、海外で救援活動をする日本赤十字社の国際救援派遣要員のメンタルヘルスについて、その貴重な体験を教えてください、国際救援派遣要員の方々のストレスを分析することによって、実態に即した体制・環境作りのための資料を得たいと考え、調査を行うことにいたしました。この調査用紙は、日本赤十字社から派遣された国際救援者の方々にお送りしています。お忙しいとは存じますが、ぜひ調査にご協力いただきたくお願い申し上げます。

本調査へのご回答は匿名でお願いいたします。また、本調査で得られたデータは、統計的に処理され、個人の特定は出来ません。また、研究目的であるストレス要因の分析以外に使用されることもありません。ただし、この研究をもとにした私たちの意見を日本赤十字社への提言というかたちで提供する可能性があることはご了承下さい。その際にも本調査への回答者個人のデータが特定されることはありませんので、感じておられるまを率直にお答えいただければ幸いです。回答は、各項目について当てはまるところに○をつけていただくか、自由記述して下さいようお願いいたします。派遣経験が複数回ある方は、各時期で最も強くストレスを感じた経験をお書き下さい。返送には、同封の返信用封筒をご使用下さい（差出人の記載は不要です）。8月31日までに用紙2枚をご返送下さるようお願いいたします。

* この調査研究は、日本赤十字秋田短期大学から共同研究費助成を得て行っています。

また、研究の趣旨については、日本赤十字社にもご説明申し上げております。

【回答者の属性】

あなたに当てはまるところを○で囲んで下さい。派遣期間は日数をお書き下さい。

性別：1. 男性 2. 女性

職種：1. 看護師 2. 医師 3. 事務 4. 技師 5. その他

派遣回数：1. 1回 2. 2回 3. 3回 4. 4回 5. 5回以上

派遣期間：1回だけの方（ ）日間

複数回派遣の方 最短（ ）日間 — 最長（ ）日間

任務内容（複数回答可）：1. 紛争犠牲者の救援
2. 災害等の被災者の救援
3. 難民・避難民等の救援
4. 発展途上国赤十字社等に対する開発協力
5. 社会的弱者の救援

アンケート

I 海外派遣が決まってから、出発するまでの間に感じたストレスは、どのようなものでしたか。具体的にお書き下さい。

それにどのように対応しましたか。具体的にお書き下さい。

その対応はどの程度有効でしたか。10段階評価で当てはまる数字を○で囲んで下さい。

効果なし

効果あり

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

その時期に組織や周りの個人に期待する対応はどのようなものですか。具体的にお書き下さい。

II 現地に到着した直後に感じたストレスはどのようなものでしたか。具体的にお書き下さい。

それにどのように対応しましたか。具体的にお書き下さい。

その対応はどの程度有効でしたか。10段階評価で当てはまる数字を○で囲んで下さい。

効果なし

効果あり

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

この時期に現地または日本の組織や周りの個人に期待する対応はどのようなものですか。具体的にお書き下さい。

III 任務中に感じたストレスはどのようなものでしたか。具体的にお書き下さい。

それにどのように対応しましたか。具体的にお書き下さい。

裏にもご記入下さい。

その対応はどの程度有効でしたか。10段階評価で当てはまる数字を○で囲んで下さい。

効果なし 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 効果あり

この時期に現地または日本の組織や周りの個人に期待する対応はどのようなものですか。具体的にお書き下さい。

Ⅳ. 帰国にあたってのストレスは、どのようなものでしたか。具体的にお書き下さい。

それにどのように対応しましたか。具体的にお書き下さい。

その対応はどの程度有効でしたか。10段階評価で当てはまる数字を○で囲んで下さい。

効果なし 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 効果あり

この時期に現地または日本の組織や周りの個人に期待する対応はどのようなものですか。具体的にお書き下さい。

Ⅴ. 帰国してからのストレスにはどのようなものがありましたか。具体的にお書き下さい。

それにどのように対応しましたか。具体的にお書き下さい。

その対応はどの程度有効でしたか。10段階評価で当てはまる数字を○で囲んで下さい。

効果なし 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 効果あり

この時期に組織や周りの個人に期待する対応はどのようなものですか。具体的にお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。